

第二十六回 齋藤茂吉短歌文学賞

小島 ゆかり 『泥と青葉』

青磁社

選考委員

委員長 三枝昂之

委員 小池 光

永田和宏

馬場あき子

【贈呈式】

平成二十七年五月十七日（日）

（五十音順）

小島ゆかり 『泥と青葉』

(自選)

抜け出づる魂をつかみもどすごと手にまるごとの無花果を食む

そらまめはみんなをかきな顔をしてなんでやねんと莢を出でくる

飯を炊く湯気こもりゐる部屋暗しかたじけなくてすつぱいいのち

ああ犬は賢くあらず放射線防護服着る人に尾をふる

はばたかず風に乗るとき存在の眼みひらくおほぞらの鳥

二人子を亡くした母がわたしならいりません絆とかいりません

こんにやくのやうに歲月ふるへをり老いたる親らみなわれを呼ぶ

父そこに途方に暮れて立つごとし頭枯れたる冬の鶏頭

猫としてわがかたはらにゐてくれるあなたはだれか青い夜の雪

欲あはき日と欲ふかき日とありて欲深き日の青葉うつくし

修辞と等身大の暮らしと

三枝 昂之

小島さんは暮らしの切実を詩に高める自在な表現力に定評があり、その特徴は東日本大震災と向き合った作品を含む今回の『泥と青葉』にも生きています。

その夜明け冷えつものりつつ街上に鶏のごとくうづくまりたり

その翌日あかるくさむく晴れわたり ああたくさんの人が死にたり

震災当日のあの時から翌朝までの自分の現場に徹して詠いながら、直接の被災者でない自分はどんな当事者なのかを一連は問うており、個人の現場の息遣いと表現力が一つになったときの歌の力を改めて教えている。

高齢化した親とどう向き合うか、日々の暮らしと仕事にどんな緊張と喜びがあるか。そうした課題を温かく詠う小島さんの等身大の世界もこの歌集の魅力である。

齋藤茂吉短歌文学賞に豊かな成果が加わったことを心から喜びたい。

向日性の歌境

小池 光

第二十六回齋藤茂吉短歌文学賞は小島ゆかり氏の歌集『泥と青葉』に決まった。選考はごくスムーズで、早い段階から選考委員の意見は一致した。なかなかめずらしいことである。

小島ゆかり氏の歌は、とてもものびのびして、明快である。難渋なところ、過剰に屈折するところ、謎深いために読解につまずくようなところがない。こういう歌はあるようでなかなかない。向日性の歌境とでも言うべく、つねに明るく、前を向いて肯定的に現実を見つめ、辛いことや苛酷なことに直面しても、ほほ笑みを絶やさないうちに歌っている。歌集の大きなテーマは親の介護であり、普通ならいくらでも深刻になるところであるがそうはならず、ときにユーモアを感じさせるまで、強く、明るい。悲しみは、その背後にいつも控え目に隠れている。今後のさらなる充実を待つのである。

明るさのなかの悲しみ

永田 和宏

小島ゆかりは、自分の身の丈や目の高さを誰よりよく知っており、大切にしている歌人だと思っている。表現はそれらを越えて声高になることもなく、低く見積もって低回趣味に陥ることもない。何より自分の目の高さを信じ、自分の全体重をかけて対象に向かつていくという一途さに、歌の清潔さが現れるのである。

本歌集『泥と青葉』では、東日本大震災が詠われ、父の介護が切実な大きなテーマとなる。いずれの対象に対しても、過剰な思い入れや俯瞰的な断定ではなく、身の丈のすべての感覚を動員して対処しようとする姿勢が、時に涙ぐましいまでの明るさに反転する。その明るさのなかに、小さな存在としての一人の女性の悲しさがしみじみと寄り添うのである。

四人の審査員が一致して推せる歌集はそう多くはない。今回そのような歌集に巡り合えたことを、齋藤茂吉短歌文学賞のために喜びたい。

貴重な才質

馬場 あき子

小島ゆかりさんは繊細さと大らかさを併せもつ感性豊かな歌人である。小島さんに見つめられた対象は、そこから格別な生命をもちはじめ。取りわけ物言えぬ動物や脆弱な生命のものたちは、勞らわれ、愛を注がれて、その存在の尊さをみせはじめ。まして三・一一のような大震災によって泥土化した地域への思いは切実で、自身の身を置きかえるような痛みをもつてうたわれている。

そこにまた、親や姑たちの老いも加わり、生と死にじかに対面する日々が重なって、心はいっそう重くなるが、悲しみの中にもどこか明るさを失なわぬ抒情や知的な軽みの面白さなど貴重な才質といえるものだ。

受賞のことば

小島 ゆかり

平成十五年に行われた「斎藤茂吉没後50周年記念シンポジウム」(全四回)の、第二回(五月十日・上山市体育文化センター)に、パネラーとして参加させていただき、会場で斎藤茂太先生にお目にかかりました。大学時代、斎藤茂吉の話題が出るかもしれないという失礼な動機から、先生の「精神医学」のご講義を受講していたのでした。久しぶりにお目にかかれ、本当にうれしいことでした。

さらにそのシンポジウムのご縁で、その後三年間に渡り、山形県内の小・中・高校、延べ十七校への学校訪問・実作指導を担当させていただき、現在も「斎藤茂吉ジュニア短歌コンクール」の選考委員を承っております。茂吉の故郷の若い方々との交流により知ることができた、この地の自然や風習など、時代を超えて茂吉の歌の世界に少し近づくことができたような気がしております。

なつかしいさまざまなお出をかしめながら、このような立派な賞をいただきましたことを、心からうれしく思います。選考委員の方々に、深く感謝申し上げます。

ただいまのよろこびを胸に、また新しく歩み出したいと思えます。ありがとうございました。



第26回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

小島 ゆかり (こじま ゆかり)

歌人。

1956年（昭和31年）愛知県生まれ 58歳。

早稲田大学第一文学部卒業。

大学在学中に短歌と出会い、コスモス短歌会入会。宮柗二に師事。

「コスモス」現選者・編集委員。現代歌人協会理事。

日本文芸家協会会員。産経新聞歌壇選者。

【主な著作等】

歌 集：平成8年『ヘブライ暦』、平成12年『希望』、
平成17年『憂春』、平成25年『純白光 短歌日記2012』など。

著 書：平成11年『蛍の海 アメリカへ日本へ私へ』、
平成14年『短歌入門－今日よりは明日』、
平成27年『和歌で楽しむ源氏物語－女はいかに生きたのか』など。

受賞歴：平成13年若山牧水賞、平成18年迢空賞、
平成26年小野市詩歌文学賞、日本一行詩大賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆
- 第二回 本林勝夫
- 第三回 塚本邦雄
- 第四回 前登志夫
- 第五回 斎藤芳史
- 第六回 近藤芳美
- 第七回 小暮政次
- 第八回 馬場あき子
- 第九回 吉田 漱
- 第十回 佐佐木幸綱
- 第十一回 伊藤 博
- 第十二回 森岡貞香
- 第十三回 竹山 広
- 第十四回 藤岡武雄
- 第十五回 清水房雄
- 第十六回 小池 光
- 第十七回 三枝昂之
- 第十八回 花山多佳子
- 第十九回 永田和宏
- 第二十回 河野裕子
- 第二十一回 伊藤一彦
- 第二十二回 品田悦一
- 第二十三回 篠 弘
- 第二十四回 秋葉 四郎
- 第二十五回 栗木 京子

- 『親和力』 砂子屋書房
- 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 『黄金律』 花曜社
- 『鳥獣蟲魚』 小澤書店
- 『秋天瑠璃』 不識書院
- 『希求』 砂子屋書房
- 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 『飛種』 短歌研究社
- 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
- 『吞牛』 本阿弥書店
- 『萬葉集釋注』 集英社
- 『夏至』 砂子屋書房
- 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社
- 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 『滴滴集』 短歌研究社
- 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 『後の日々』 角川書店
- 『母系』 青磁社
- 『月の夜声』 本阿弥書店
- 『齋藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房
- 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店
- 『茂吉幻の歌集』 『萬軍』 ―戦争と齋藤茂吉― 岩波書店
- 『水仙の章』 砂子屋書房

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県企画振興部県民文化課内

TEL・〇三三一六三〇一三三〇六